

ニュースレター

日本母乳哺育学会

The Japanese Society for Breastfeeding Research

発行2005年11月15日 第6号

第21回日本母乳哺育学会 会長：根津 紘八（医療法人登誠会 諏訪マタニティークリニック）

会期：2006年9月23日(土)～24日(日)

場所：長野県 下諏訪町文化センター

お問合せ先：第21回日本母乳哺育学会学術集会事務局；諏訪マタニティークリニック内，担当；長幅，鮎沢
〒393-0077；長野県諏訪郡下諏訪町112-13

TEL.：0266-28-6100(代)，FAX：0266-28-5397

第20回 日本母乳哺育学会が

『母乳哺育の輪(和)をひろげる』のテーマのもと、

横浜市で開催さる！！

去る9月17日(土)から18日(日)にわたって、第20回日本母乳哺育学会が聖マリアンナ医科大学医学部小児科教授 堀内勁先生のもと、横浜市・関内ホールで開催された。2日間の学会では下記のように、会長講演、招待講演、特別講演、教育講演、シンポジウム、市民公開フォーラム、一般演題(20題)と盛り沢山のメニューが用意された。今回は、堀内学会長の肝いりで、各地で活発に「母乳哺育」を研究している

研究者や「母乳哺育」の支援に尽くされている方々が集まって、『母乳哺育の輪(和)をひろげる』という大きなテーマのもとでの学会であった。学会期間中は好天に恵まれた。全国各地から多数の参加をえて、2日間にわたり活発な討論がなされた。会議終了後は横浜の観光も楽しまれた方もおられたようである。母乳哺育に関する新しい知識を得ると同時に、会員相互の交流も深められ、収穫の多い有意義な学会となった。

第20回日本母乳哺育学術集会プログラム

第1日目(9月17日)

会長講演：「母乳育児—それはナラティブの世界」，堀内勁（聖マリアンナ医科大学医学部小児科教室）

教育講演1：「低出生体重児の栄養—特に母乳栄養について」，板橋家頭夫（昭和大学医学部小児科教室）

教育講演2：「乳房トラブルケアの実際(連携から生まれる母乳育児支援の拡大)」，宮下美代子（みやした助産院）

シンポジウム：『母乳育児支援を考える—手をつなぎあった母乳育児運動』

座長；山内芳忠(国立病院機構岡山医療センター臨床研究部)，川上義（日本赤十字社医療センター新生児未熟児科）

1. 「エビデンスに基づいた母乳育児支援—科学的・効果的に支援するために—」

越山茂代（越山助産院，日本ラクテーション・コンサルタント協会）

2. 「乳汁分泌機序から考えた母乳育児支援」，根津八紘(医療法人登誠会諏訪マタニティークリニック)

3. 「臨床実践に基づいた母乳育児支援」，福田良子（アールアンドワイ桶谷式母乳育児相談室）

4. 「母乳育児運動—赤ちゃんに優しい病院認定を通して」，山縣威日（サン・クリニック）

5. 「学問的追求から母乳育児理論を形成するために」，牛島廣治（東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻発達医科学教室）

第2日目(9月18日)

招待講演：「Sucking mechanism of breastfeeding」，Peter E. Hartmann, BRurSc.Ph.D. (Univ. of Western Australia)

特別講演：「女性としての身体性回復の意味」，三砂ちづる（津田塾大学国際関係学科）

市民公開フォーラム：「母乳育児から得たこと」，一般演題：(20題)

— (1) —

第2次世界大戦直後の我が国の小児保健の課題として感染症と栄養があげられていた。私たち母子保健従事者はその克服にけんめいに尽くしてきた。しかしその努力の中での失敗の一つは母乳育児を栄養と感染症予防に分解し、それにスキンシップという味付けをして母子保健関係者や親に提示したことである。これは人工乳を作る過程で牛乳を各栄養成分に区分けして回収し、そして栄養的な過不足を調整するという手法と同一なものである。近年、母乳育児が再び見直され、その推進が叫ばれているが、なかなか進展しないのは、一度身につけてしまった分析手法に基づく母乳育児指導に一因があるようにおもえる。この分析主義的アプローチは母乳育児支援だけでなく、他の医療分野でも根拠に基づく医療(EBM)として大きく叫ばれ、医療政策ともなっている。今日の母子保健の最大の課題は親子の心の健全な発達といわれている。すなわち、育児不安、育児困難、虐待、引きこもり、思春期の適応不全、少年犯罪の予防という課題である。私たち母子保健に関わるものはそうした視点で母子関係を見直す必要がある。妊娠・出産・産褥・育児を通してひとは過去を遡り、未来を考え、そして現実のわが子とわが身に起きる身体的、心理的、社会的変化に対処しようとする。この営みの一部は科学的根拠に基づいて解釈されているが、多くの部分は得られている科学的根拠だけでは

支えきれない。すなわち、EBMをも包含するナラティブ(物語り)に基づいて母乳育児をとらえ、支援することが必要である。ナラティブとはある出来事についての記述を、何らかの意味のある関連によりつなぎあわせたものを言う。百人の医療者がいれば百通りのナラティブが存在するので、同じ事象に対して複数の意味づけを可能とするアプローチであり、相容れないものの多様性を容認し、つなぎ、意味づけることを特徴とする。言い換えると、理論、仮説、などを全て「一つの物語」として、個についての唯一の正しい物語は存在しないと理解し、より適切な物語を選択するアプローチである。そうしてみると、母乳育児という物語をいとなむ親子をその物語にそって支えることが大切であることがわかる。乳房ケアの技法や、現在までに知られているエビデンスをもとに母乳育児指導をすることももちろん大切であるが、さらに個々の親子の思いを傾聴し、「母乳育児」を「母乳」中心の視点ではなく、「育児」を視点としたプロセスとして支えることが大切となる。そのためには家族と母子の関係性、担当助産師・保健師間の関係性、医師集団間の関係性ととともに、その3者間の関係性にどのような物語が進行しているかを解釈し、対象となる母子の母乳育児の物語づくりを支える支援が必要になると考える。

母乳栄養の吸啜メカニズム

Peter Hartmann, BRurSc, Ph.D. (Univ. of Western Australia)

過去において、オーストラリアの先住民女性は厳しい砂漠気候で、食物や飲料水の入手が困難であったにも拘らず、母乳育児を行っていた。1788年のヨーロッパ人の入植後、19世紀の後半にかけて乳児用人工乳が導入されることにより、我が子を母乳で育てることを選択する西部オーストラリア女性人口は1972年には48%以下にまで落ち込んでしまった。しかし、1972年以後、それ以前の低下傾向が大きく回復していった。回復した理由はオーストラリア母乳育児連盟(ABA)や最近では公共サービス、私的母乳相談員による母親への支援によるものである。母乳育児連盟による初期の支援はその当時保健専門家に基準に照らし合わせた努力として受け入れられていた経験に基づいた実践によるものであった。現在では95%までの母親は母乳栄養を希望しており、西部オーストラリアの93%までの母親は退院時に我が子に母乳栄養を行っている。しかし、6ヶ月までは母乳栄養を行うというWHOの勧告に反して、産後6ヶ月まで母乳育児を行っている母親は60%どまりである。開始時に高い母乳育児率であることは西部オーストラリアの殆ど全ての母親が自分の子どもに母乳育児が最善である

ことを知っていることになるが、6ヶ月にはそれが60%に低下してしまうのは、この母親たちの多くが泌乳に成功しなかったことを物語っている。そこで、西部オーストラリア大学のヒト母乳育児研究グループの長期目標はWHOが定義するようにヒトの母乳分泌の臨床的管理のための根拠を提供することで母乳育児成功を推進することとした。

西部オーストラリア母乳育児センターを来訪する多くの女性は母乳育児を行うための補助を受けるためであり、しかも産後3週間以内に来訪する。この女性たちの半数以上は授乳姿勢と吸着(不適切な吸啜)について問題をもった子の母親である。さらに西部オーストラリアの多くの女性(80%程度)は出生直後に乳頭痛を経験し、その乳頭痛の経験はその後の乳腺炎と関係している。乳頭痛と乳腺炎の合併は女性が途中で母乳育児をやめてしまう主な原因となっている。現在では授乳中の不適切な授乳姿勢と赤ちゃんの吸着が原因で乳頭痛が起きると考えられるようになった。乳頭痛のある母親の援助は経験に基づいて、助産師や母乳相談員が視覚的に授乳を評価することによりなされている。

正しい吸着についての母親へのアドバイスの正当性は乳腺の乳管洞が赤ちゃんの口に位置することであると説明され、その結果、乳房から乳汁がしごき取られることになる。最近の泌乳期ヒト乳房の解剖図はアストレイ・クーパー卿（1840）の見事な解剖から描かれたものである。彼は questionable な方法で泌乳期の死体を入手し、乳頭の開口部から乳管に色を付けた蠟を注入することで乳管系の鋳型を作成した。彼は泌乳期乳房の構造や生理について多くの重要な観察を行い、その中でリンパ系が乳汁産生の基質の供給源ではないことも示している。しかし、乳輪下の乳管は蠟により拡張していることを観察し、乳汁貯蔵に重要であることを示唆した。適切な死体を入手することは困難であり、また泌乳期乳房の解剖と生理について研究することに対する無力感が研究者の間にあったため、泌乳期の乳房の解剖についての研究はその後わずかしかない。我々は非侵襲的超音波画像を用いて泌乳期乳房の肉眼的解剖についても一度検討を行った。この研究はクーパーの所見の多くを裏付けた。しかし、我々は泌乳期女性の乳房の主乳管は1～2mmと狭く、浅い場所にあり、つぶれやすく、乳輪下で分岐していることを発見した。我々は“乳管洞”の存在も、乳輪下の乳管が新しく産生された乳汁の貯蔵に関与していることも見出すことはできなかった。実際、乳管が拡張するのは射乳期の約1～2分というわずかな時間だけであった。このような所見から授乳中の姿勢と吸着は赤ちゃんが乳管洞から乳汁をしごき取れることを可能にするから重要であるという示唆に疑問符をつけることになる。それにも拘わらず、授乳中の姿勢と赤ちゃんの吸着は疑いがないほど重要である。したがってこの経験に基づく観察に違った説明を与えなくてはならない。我々

は1～16週的全母乳児について哺乳中の口腔内部の頤下超音波スキャンを行った。口腔内圧は乳汁を満たした供給管（SNS）を圧トランスデューサーに接続して同時に計測した。乳児の舌が下がる（down position）と乳頭内の乳管が見えるようになり、吸引圧がピークとなり、口腔内に乳汁が流れ込んでくる。舌が上がる（up position）乳頭内の乳管も乳汁流も見えなくなる。したがって、乳汁は舌がしごく動作をするよりも陰圧を作り出すことにより流れ出ることになる。乳頭痛のある母親は正しい授乳姿勢と乳房に児を吸着させる方法を学んでいないと一般的に言われている。しかし、我々の研究は赤ちゃんとその吸啜行動に焦点をあてた。舌小帯がある児の母親は典型的に乳頭痛があり、舌小帯を矯正すると通常乳頭痛が解消され、舌の動きが自由になり、吸啜行動の改善と、それについて乳汁の移動が改善することを我々は観察した。しかし、多くの女性が乳頭痛を経験する。しかも赤ちゃんに舌小帯がないのに、この赤ちゃん達は超音波あるいは口腔内吸引曲線による観察では異常な吸啜パターンを持っていることがわかった。早産児の健康が母親にとって母乳が極めて重要であるため母乳を効果的に搾ることが必要である。正期産児の母親にとっても彼女たちが仕事に復帰した時や、他の理由で赤ちゃんが彼女達の手元にいない時に、搾乳することがしばしば必要になる。搾乳の生理についての研究は極めてまれである。しかし、効果的な搾乳と搾乳のプロトコールを開発するために、乳汁合成、乳汁分泌、射乳、児の吸啜、児の食欲についての生理学、生化学を理解することは不可欠である。この講演ではヒトの乳汁産生の生理学と母乳分泌の関係について論じた。

（水野克己訳、第20回日本母乳哺育学会抄録集より転載）

第20回日本母乳哺育学会 特別講演

女性としての身体的回復の意味

三砂ちづる（津田塾大学国際関係学科）

女性をめぐるさまざまなことは「悲惨」と「抑圧」、で語られてきた。とりわけ、妊娠、出産、授乳、子育てといったことが、前近代ではいかに女性たちに負担をかけていたか、が多く議論されてきた。女たちは避妊のすべてを知らず、次から次へと妊娠し、命の危険をさらして、子どもを生む。次々と生まれる子どもたちも、教育を受けることもできず、子守や労働においやられ、悲惨な状態だった。「不潔」で「危険」で「死」と隣りあわせで、女は「汚れて」いて・・・だからこそ医療が介入し、女性のために出産を安全にしていかなければならない・・・そういった前提をわたしたちは、迷いなく受け入れてきたし、今も同じ発想を発展途上国の国々の母子保健プロジェクトに当てはめている。それは、産む側も、戦後にアメリカの影響を色濃く受けた医療側も、望んだことであった。そのような女の悲惨、子どもの悲惨がなかった、というつもりは

まったくない。確かに多くの悲惨な出来事があった。しかし、それだけだったのだろうか。日本の貧困は、ただ惨めなだけだったのか。女性たちは医療がない、というだけで、危険極まりないお産をしていたのか。子どもたちは、救いようのない不幸の中に生きていたのか。歴史というものを、一人一人の生活の場からつづっていけば、異なった、豊かなものもまた、つむがれてはいなかったか。

19世紀半ば頃、日本を訪れた欧米人は、日本人をとて満足した幸福な人たちだ、と記している。「健康と満足は男女と子どもの顔に書いてある」と言ったり、民衆の生活の豊かさにふれて「貧乏人は存在するが、貧困は存在しない」といったりしている。女性たちも、「日本の女性は一般に、健康ではつらつとしていて、立ち居振る舞いは活発で、自主的」だ、とかかかれている（渡辺京二、「逝きし世の面影」葦書房）。

出産に関しても、現在80歳以上の方の話を聞くと、産婆すらいない辺鄙なところで、「お産なんかなんでもなかった、子どもは本当にかわいいし、何人でも産める、おっぱいくらい誰でも出ていた」という話を聞くことはまれではない。子どもたちも、やはり明治に日本を訪れた欧米人をして、「日本が子どもの天国であることを繰り返さざるを得ない。世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない。ニコニコしているところからすると、子どもたちは朝から晩まで幸福であるらし

い」と言わせている(渡辺京二、「逝きし世の面影」葦書房)。この国に異なる文明を持ち込むことの疑問さえ、外国人に抱かせているのである。

もとより、「昔がすべてよかった」などというつもりはない。しかし、私たちは、この眩しい消費文明の前に、存在したであろうからだの豊かさについて、今一度思いをめぐらすこともできるのではないだろうか。それは、母乳哺育、というこの学会の目指されるところとも無縁ではない、と考える。

第2回日本母乳哺育学会奨励賞 4演題に授与さる！！

日本母乳哺育学会では昨年の第19回学術集会から優秀な発表論文に対して奨励賞を授与し、これを励み

- 1) 当院NICUにおけるカンガルーケアの実際と母乳育児支援, 相京美徳, 他(聖マリアンナ医科大学小児科)
- 2) 未熟児母乳における授乳期別のリン脂質蘇生の検討, 金子徳胤, 他(順天堂大学医学部小児科)
- 3) 母乳中の antimicrobial peptides 活性に関する検討, 吉尾博之, 他(国立病院機構岡山医療センター新生児科)
- 4) 当院における不妊治療後の母親の母乳確立状況～第一報～ 森真澄, 他(聖マリア病院母子総合医療センター産科, 新生児科)

にさらなる研鑽を積んで戴くこととした。今回は審査の結果、次の4つの発表論文が選ばれた。(順不同)

日本母乳哺育学会主催 第1回『母乳育児勉強会』開催さる！

かねてから懸案事項になっていた本学会主催の『母乳育児勉強会』を、第20回日本母乳哺育学会学術集会から本学会理事の石井先生のご尽力で開催することができた。本学会会員の多くは臨床現場で働いている。しかし、「母乳哺育」のことをどんなに勉強しても実践ができなければ意味がない。そこで、これらの目的を一つにする多くの専門家や母乳育児をすすめてしている人たちが一堂に集まり、最新の母乳育児に関する知識をえて、明日からでも実践してもらうための勉強会を企画した。第一回目の教育講演は「なぜ 今 母乳保育」というテーマで、和歌山県立医科大学・名誉教授の小池先生によって、永年の母乳研究から、沢山の文献を紹介しながら、『知っておきたい母乳の知識』についてわかりやすく解説された。先生は「哺乳動物

の母の乳房から分泌された白色の液体」は皆同じだが、成分も同じと勘違いをしていないか！と注意を喚起し、講演中も終始「人の乳は牛の乳と一緒にではない」ことを強調していた。

また、本年2月に発表されたアメリカ小児科学会の『母乳哺育に関する勧告』が紹介された。シンポジウムは「なぜ できない 母乳保育」というテーマでなされ、第一線の現場で苦労している事例が報告された。今回は、広報も充分でなかったにも拘わらず、定員80人のところ64人の参加者をえて、活発な討論がなされ盛会のうちに終了することができた。参加者は母乳に関する新しい知識を得て、今後も正しい母乳哺育をすすめていくエネルギーをもらったものと思われる。今回の勉強会の内容は以下の通り。

★ 教育講演：『なぜ 今 母乳保育』 講師；小池 通夫(和歌山県立医科大学 名誉教授)

★ シンポジウム：『なぜ できない 母乳保育』 シンポジスト；石田 ひろえ(藤枝市立総合病院 助産師)

涌谷 桐子(沖縄県立宮古病院産婦人科 医師, IBCLC)

近藤 亜美(富松レディスクリニック 助産師)

- 【学会事務局】より：
- ・日本母乳哺育学会のロゴ・マークが決まりました。
 - ・会員の方で年会費を未納の方はお振込み願います。
 - ・賛助会員を募集しております。母乳哺育活動にご協力いただける企業・団体がございましたら学会事務局へご連絡ください。

＜日本母乳哺育学会事務局 ニュースレター、第6号＞ 発行：日本母乳哺育学会

2005年11月15日 発行

発行者：小林登 編集責任者：植地正文

日本母乳哺育学会事務局： 東京大学大学院 医学系研究科 国際保健学専攻 発達医学科学教室

(牛島 廣治) 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 TEL/FAX 03-5841-3629

E-mail: hushijima-tky@umin.ac.jp URL: <http://square.umin.ac.jp/bonyuu/>

ホームページ： URL: <http://square.umin.ac.jp/bonyuu/>